

論文の内容の要旨

論文題目 体制転換期ブルガリアにおける民族とジェンダー
- つながりと差異化の語りと実践

氏名 松前 もゆる

本論文では、近代国家成立以降、特に社会主義時代と体制転換後のブルガリアを対象に、政治・経済体制の転換がもたらす世界についての認識枠組みの変化のなかで、人々が自己のイメージや位置どりをどのように再編しているのかに焦点をあて、ネイションとジェンダーの絡まり合い、国家と個々人との関係、そしてアイデンティティに関して考察した。

まず、国民国家と連関して重要な範疇である「民族」をカテゴリー、つまりは「世界に関するパースペクティブ」ととらえ、国家によるカテゴリー化（「名づけ」）と、それに対する調査地域での動きを検討した。調査地域には、「ボマク」と呼ばれる、ブルガリア語を母語とし、イスラームの伝統を受け継ぐ人たちと、ブルガリア正教徒、ロマが共に暮らす。本論文では特に、「ボマク」と呼ばれる人たちに注目した。

近代国家の成立以降、ブルガリアにおいても領域内の同質性が模索され、その際、他のバルカン諸国と同様、言語とともに宗教がネイションを成立させる重要な要素となったため、マジョリティと言語（ブルガリア語）を同じくするが、異なる宗教（イスラーム）を背景とするボマクをどう位置づけるかは、ブルガリア・ネイションの境界と関わる重大な問題であったと言える。その過程で、国家はボマクをその言語ゆえに「ブルガリア人」に包摂しつつ、彼らのなかのブルガリア・ネイションにとって異質な要素を排除していく。つまり、ボマクが存在によ

って「ブルガリア人」の境界が立ち現れるとともに、彼らはネイションの周縁に置かれることになった。結果、国家によるカテゴリー化に従いつつ、力の拡大を目指す反応を生むと同時に、周縁故の独特の対応も生み出し、人々の中には複数の傾向性が生じることとなる。

また、こうしたネイション形成は、近代ブルガリアにふさわしい「男」「女」を形成する試みと重なっていた。人々の日常レベルにまで関与しつつ、「(内なる)他者」と位置づけられたムスリムの「らしさ」、「男らしさ」、「女らしさ」をもつくりかえることを目指したのである。

上記の施策は社会主義政権にも引き継がれた。それらは、社会主義にふさわしい構成員の形成を目指すものであると同時に、ライフサイクル儀礼、着衣、行動規範といった場面において、社会主義化するうえで「後進的な」要素の排除、「ブルガリア人民」性の確立を掲げるなど、ネイションおよびジェンダーと分かちがたく結びついていた。特に、1970年代からはじまった大規模な祭日や儀礼の再編は、ムスリムのみならず、マジョリティである正教徒も含め、社会主義的儀礼システムの確立を通し、人々の意識や精神に影響を与えようとするものであった。加えて、時間の流れ、人の一生に対する国家の管理を目指した施策と位置づけることができる。しかし、無論、国家による一方的な「押しつけ」がおこなわれたとは言えず、人々はそれらの一部を受容しつつ、あるところは抵抗し、新たな解釈を施した。そして、これらの儀礼では、葬儀で故人の社会主義国家建設への貢献が讃えられるにせよ、儀礼の遂行の仕方によって人々の国家への態度を示すにせよ、国家と個人が結びつく機会となっていた。マイノリティであるムスリム、ボマクの「伝統」は、国家からより強い規制を受けたが、人々は村という空間において体制と交渉し、ローカルな仕方では祭日や儀礼をとりおこなってきた。

一方、80年代に大規模に実施された衣装への規制の矛先は、主としてイスラームに特徴的と考えられるゆったりしたズボン「シャルヴァリ」を身につけ、スカーフをかぶっていた女性たちへ向けられた。彼女たちは、それまでも学校や職場などでは制服等を着用していたが、村の通りなどでのシャルヴァリおよびスカーフの着用禁止は、多くの女性たちの間に混乱を招いた。それは、家のなかにあった布や帯まで押収するという手法も含め、これまで学校や役場など外部とつながる場とそれ以外での場所で行動様式を変換するかたちで国家と「交渉」していた人々にとって、従来にない干渉を意味していたと言える。

他方、男性に対して社会主義時代を通じておこなわれた割礼への規制は、ムスリムの男性性に変更を迫るものでありえた。しかし、聴き取りからはむしろ、近代的ネイションおよび「男」としての身体が兵役を契機として獲得されたことが見えてくる。それは、非常に些細な事例のようでありながら、兵役を機に豚肉を口にするようになったという男性たちの説明にも表れて

いるだろう。

以上から、社会主義体制が、近代以来のネーション形成と深く結びついたかたちで、時間や空間を管理し、良き人民、良き労働者の創出を目指したことが明確になるとともに、「受容」と「抵抗」のいずれかで単純には片付けられない人々の対処の仕方が見えてくる。従って本論では、権力の規制のなかであって、それを受け入れ、改変し、解釈しつつ遂行してきた実際、「上から」と人々の間の力のせめぎ合いを描くことを試みた。

では、社会主義体制崩壊後はどうかと言えば、まず指摘できるのは、国家権力の後退であろう。日常のある面を規定し、時間や空間の秩序に明確に関与していた国家は姿を消した。一方、市場経済化や国際関係の影響を受け、人々の新たな位置どりが模索されている。

調査地においても、新たな経済状況、諸外国とのつながりが、人々にこれまでと異なる参照点を提供し（例えば、「ヨーロッパ」や EU）、それが世界の把握の仕方と自らの位置づけに影響を与えている。同時に、儀礼の遂行や着衣実践、ジェンダー規範といった事例からは、社会主義時代の経験と、ポマクの「伝統」と結びつくイメージが人々にモデルを提供しており、そうしたなかで状況に応じて自己の位置が選りとられていることが見えてきた。ただ、「伝統」とされることは社会主義以前の記憶と結びつく一方で、社会主義時代の営みと深く関わっている点を見過ごすことはできない。「伝統」のイメージは、社会主義時代の国家からの働きかけと、それとの交渉のなかで浮かび上がってきた面があると言える。

こうした状況下、生活の場において人々の折衝、論争の焦点となったのは、一言で言えば、ジェンダーの側面である。殊に「仕事」にまつわる領域でそれは顕著で、市場経済下にふさわしい「男」「女」を形づくっているように見える。また、調査地において明らかとなったのは、世代間の労働交換により、従来の性役割と新たな経済状況を接合する実践であった。人々は、状況にあわせて「家族」の範囲を（上下の世代や傍系に）拡大したりしながら、体制転換以来続く経済的困難に対処している。家族の範囲を伸縮して経済上の問題を解決することも社会主義時代の手法の延長にあるが、それが時代の要請にあわせて再編されている。

国家の力が後退し、代替制度が不足している状況で、国家機関が担っていた役割を「家族」が担っている場合も多々見られる。家庭という領域は、社会主義時代も男女双方にとって意味を持ち、現在も決して女性のみが支える場所ではないとしても、そこは役割分担に明らかなようにジェンダー化されており、家族が社会のなかで重みを増すことは、女性にとってより負担となる可能性は充分にある。ただ、「家族」のなかで女性である、特に母であるゆえの負担は、それが従来の女性規範に従うように見えながら、例えば出稼ぎが可能になることで変化につな

がりうる場合もある。稼ぎが期待される男性たちも、市場経済化のなかで従来よりも多くの賃金を手にすることが可能になっただけに、むしろそうした職にアクセスできない人たちにとっては困難な状況になると考えられる。つまり、世代や職業、収入（階層）といった差異も視野に入れつつ、具体的に男と女の関係を見ていく作業が必要と言えるのである。

しかし、他方で注目すべきは、男女の関係、性分業のあり方などが、「われわれ」と「彼ら」の差異の指標として語られていることである。「われわれ」ボマクの男女関係 対 「彼ら」＝ブルガリア正教徒やトルコ人が比較の対象となることもあれば、（旧西）ヨーロッパにおける男女平等が対比されることもある。自己の布置についての語りや実践は、ジェンダーを含め、上記のようなさまざまな差異が絡まり合うなかで、多様な境界を立ち上げている。このようなアイデンティフィケーション、自己の位置づけのプロセスにおいて、体制転換は準拠枠組みを再編したのであり、またそのようなものとして人々に経験されたと言える。

以上の如く、「ボマク」と呼ばれる人たちの社会的布置は、決して民族範疇のみではなく、ジェンダーや親族への帰属など多様な社会関係や、世代、職業などの差異によって支えられてもいる。実際のところ、これらのいくつかのつながりの中で、状況によって人々はいずれかを重視したり、うまく組み合わせたり、他者と差異化したりしながら、自己を位置づけている。さらに、そうした日々の実践の重なり合いが人々の間にゆるやかな共同性を形作り、微妙な所作や言葉等々に相違のある他所と対照して、村を中心とする「場」と結びつけて考えられている。ただ、それは本来、明確な境界を持った「共同体」として考えられるべきものではなく、どのようなつながりが時によって重視され、時に分断されたりするかという個人を基点としたモデルから考えていくべきかもしれない。しかし、一方で、国家によるカテゴリー化とそれへ人々をまとめようとする要請は確実にあり、人々はその力関係の中であって、いくつかの社会関係や差異の交錯に支えられた自己の位置づけを見出している。つまり、アイデンティティとは、生活状況において周囲のつながり、関係に支えられる、それらの交わり合う位置として考えることができるだろう。